
世界ハカクモ美シク

palm

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界ハカクモ美シク

【Nコード】

N1731Z

【作者名】

palm

【あらすじ】

勇者がいるから、魔王を討てる。魔王がいるから、勇者は現れる。勇者は世界に平和をもたらす。魔王は世界を恐怖に陥れる。それは当たり前で、当然の世の理だった。そして、この世界にもまた一人の勇者と一人の魔王が、時代の節目に現れていた。これは、世界を救った一人の勇者のその後の物語である。

最終的に立場が逆転したプロローグ（前書き）

ストックなんてありません。ノリとテンションで書き、更新します。
なので、一話の長さは短いですが、マメに更新したいと思います。

最終的に立場が逆転したプロローグ

「　　いいか、魔王というのはだな」

「……………」

俺の目の前には、自称勇者がいる。否、自称ではない。この世界で唯一人の勇者である証、『勇者剣ライトエンド』を腰に携えているのだから。

「こういう場面だったらあれだ、『貴様に世界の半分をくれてやる』とか言って勇者の信念を意味無く鈍らせようとするのがセオリーじゃないか」

女が勇者というのは珍しいが、文献によると決してなかったことではないので問題ない。

問題があるとしたら　　。

「そこで私がこう言うんだ。『むしろ全部寄せ』ってな。やっぱ一人で一から世界征服するのはメンドイし、かといって世界は欲しいで大変なんだぞ、私も。つーか魔王。アンタ世界征服するの遅すぎ。いつになったら進行してくんだよ。だからこうして私がわざわざ来てやったつてのに、『よく来たな勇者よ。最後の決戦を始めようか』は無いわー。何が最後の決戦よ。中ボスもないし、城の中にモンスターはほとんどいないし、なんだ？　もしかして魔族って人手不足なのか？」

勇者のこの性格だ。

だいたい、今の俺達の位置関係だっておかしい。俺の知る魔王と

勇者の関係なら、魔王が玉座に座って勇者を見下ろすのがセオリーだ。

なのにこの勇者は、俺が、勇者が城に開けた穴の補修作業に行っている間に俺が座るはずの玉座に座っていた。足を組んで、銅に入った格好で。

え、何この勇者。魔王よりよっぽど勝手なんだけど。

「聞いてんのかよ、魔王さんよー」

「……うむ」

そして、何故俺は勇者から『魔王について』を語られているのだろうか。

俺は教えられた通り、一匹狼で強い孤高の王者を演じていたというのに。

「だいたいアンタは魔王っぽくねーんだよ。この前の戦いん時だつて、モンスターのピンチに颯爽と駆けつけて何処のヒーローだったーんだよ」

「いや、しかしそれは上に立つ者として当然の……」

「甘い。甘すぎるよ魔王。駒は使ってなんぼ。使い捨てが常套手段だろーが」

「ただでさえ少ない魔族の同胞を助けることが、それほどおかしいことか？」

人間と比べれば能力は高いが、繁殖力の乏しい我が一族の仲間達を救いたいと思うのは当然のことだと思う。

「んなもん世界征服してから産んで増やしていけばいいんじゃないか」

「死んだ者は二度と戻らない」

「なら、大切なやつは大事に守っとくんだな」

「……俺にとって、魔族みんなが家族で、大切な人だ」

「ハッ！ 家族？ あのモンスターがか？」

「そっだ」

小さな頃からこの城で共に暮らしてきた、かけがえの無い家族だ。

「いいねアンタ。気に入ったよ」

勇者はニヤリと笑うと、玉座から立ち上がる。

「……悪いが、俺はお前が気に入らない」

腰から『魔刀ダークエンド』を抜き、構える。

「ハハハッ！ いいねえ。やっぱりラストバトルでは殺気ぐらい込められてないかねー！」

応じるように、勇者も『勇者剣ライトエンド』を抜く。

「……俺は、家族を守って見せる！」

「来な、魔王！ お前を倒して、私が世界を手に入れてやるよ！」

こうして。

世界を守る勇者と、世界を滅ぼさんとする魔王との最終決戦の火蓋がきって落とされた。

何がどうしてこうなった的な第一話（前書き）

短い。その一言に尽きます。

何がどうしてこっぴなつた的な第一話

「……で、魔王様？ これはいったいどういふことなんですか？」

朝食の席。無駄に長くデカイ机の上に並べられた料理に手をつける前に、猫又のマイアメイド長が頭に怒りマークを幾つかくっつけながら質問してきた。

「……なにか問題が？」

「大有りです！」

毛を立たせながら怒りを体で表現するマイア。黒髪のおかつぱ頭に色白の肌。顔も整っていてスタイルもいい。だが、いかんせん真面目すぎるくらいがあるのがたまに傷だ。

「何故、勇者が、魔王様の城で、朝食をのんきに食ってるんですか
——！！！！？」

だから、そんなどうでもいいことを気にする。

「……友情だ」

「え……？」

「俺と勇者は、友情と言う絆で繋がった友だ。友を朝食に招いて何が悪い」

「……あのー魔王様？」

「なんだ」

「たしか昨日までしてましたよね？ 魔王様と勇者の決戦」

「ああ」

流石は勇者だった。一週間の間、俺の攻撃を凌ぐとはな。

「魔王様、ものすごく怒ってませんでした？ 人質を取られたり、城を破壊されたりで」

「ああ。だが、城は直してくれた。人質は元から傷付ける気はなかったらしい」

早とちりってやつだな。俺もまだまだ魔王としての修行が足りない。

「嘘に決まってるじゃないですか！ あの時の勇者のあの悪どい笑みを見なかつたんですか!？」

「オイオイ、黙って聞いてたらまたずいぶん酷い言い草じゃないか、ネコさんよー」

「……悪いな、シャイナ。家のメイドが気に障ったことを言ったら俺を殴ってくれ」

部下の責任は俺の責任だ。

「ま、魔王様……」

「いや、別にいいよ。間違ったこと言ったわけじゃねーし。そんなわりさ、アウル。私がもうちょいここにいること認めてくれるか？」

「ああ、お安いご用だ。部屋は昨日と同じでいいか？」

「オツケー」

そう言っただけでシャイナは食堂を機嫌良さげに出ていった。見ると、机の上にあった食事はほとんど平らげられていた。

「……は！ 然り気無く話をそらされて、滞在期間伸ばされました！ というか、いつの間に魔王様と名前交換を！？」

横で「あの悪女め……」と呟いているマイアに新しい食事の準備を頼んで、俺は椅子に座る。

開いた窓から聞こえるワイバーンの鳴き声は、今日も新しい朝が来たことを感じさせてくれる。

「いい天気だ……」

世界は今日も美しい。

何がどうしてこうなった的な第一話（後書き）

マイア

「皆さん、初めまして。魔王様の下でメイド長をやらせてもらっている猫又のマイアです」

アウル

「俺はマイアの主。魔王のアウルだ」

マイア

「さて、魔王様。次回予告らしいですがどうしましょう」

アウル

「ふ、そんなものは決まっている。魔王らしく、次回予告をするのみだ」

マイア

「魔王らしい次回予告がどういうものかは判りませんが、流石です魔王様」

アウル

「次回。俺と勇者に芽生えた友情。そこから始まる、魔族と人間の歩み寄り。そうして世界は勇者の名の下に平和へと進み出す」

マイア

「実際は勇者による勇者の為の世界征服ですが」

アウル

「世界八カクモ美シク第二話、『平和な世界』。勇者よ。俺は

お前に、俺の全てを託そう」

マイア

「尚、この予告は本編とは全く関係がないので、」
「了承下さい」

真・魔王が現れた第二話（前書き）

どうしてこうなったのか、自分でも不思議です。

真・魔王が現れた第二話

「んー。しっかし、本当にこの城は人が少なえなあ」

昼。中庭でマイアと雑談していると、勇者シャイナが歩いてきた。

「そもそも人間達の城にいる召し使いが多すぎるんです。私達の王は自分のことは自分でするので、私達の仕事は掃除と食事の用意だけですから、少なくとも何とかなるのです」

「というか、魔法で大体の事は出来るから人が多いと金の無駄にしかならないだけだ。」

「まあそりゃ魔族はね。人間より能力は高いし魔法も上手いからそうだろうけど、私達人間はそうもいかないのさ」

「……シャイナは魔法が上手いじゃないか。城だつてすぐ直したしな」

「ハッ、私を誰だと思ってるんだ？ 世界を救う勇者様だぜ？」

「ふ、そうだったな……」

「と、それよりも聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「何だ？」

「いや、城ん中は大体見終わったんだけどさ」

「魔王様の家で何を勝手に……」

呆れた様子 of マイア。だが、そんなマイアには目もくれずにシャイナは喋る。

「どーしてもどこにあんのかわかんない部屋があつてさー」

「……何処だ？ 案内してやる」

「お、サンキユ。行きたいのは宝物庫」

ゾクッ

シャイナが宝物庫と言つた瞬間、恐ろしいほどの殺気が俺達を襲う。

「なん、だ、けど、さ……」

シャイナも気付いたのか、声が小さくなっていく。

この殺気、俺達の戦いの時の比べものにならないほどに濃い。俺は横を見る。

「……………」

そこには、この世の物とは思えないほど黒いオーラを纏つたマイアがいた。

「マ、マイア……?」

「はい、なんですか？ 魔王様」

くっ……、凄まじいまでのプレッシャーに押し潰されそうだと見ると、シャイナも苦しそうにしている。

……まさか、マイアこそが魔王の次に現れると言われている、裏ボスなのか!?

「何をそんなに怒っているんだ？ その、俺が悪いことをしたなら言ってくれないか？」

「いえ。私は魔王様に怒っているわけではありません。分も弁えないうこそ泥にキれているのです」

「ひっ……!?!」

馬鹿な。あのシャイナが怯えている……？ まさか、俺が感じている殺気は漏れだしたほんの一部にしか過ぎないのか!?

とりあえず、マイアはシャイナが宝物庫に近づくの嫌がっていることはわかる。

「……さて、我が主の財産を盗ろうとすること泥に、どんな罰を与えましょうか……」

フッフ……、と恐ろしい笑顔を浮かべるマイア。

シャイナは魔王と対峙したかのように顔面蒼白だ。だが、流石は勇者と言うべきか。一般人なら腰を抜かしているであろう殺気の中、後退りもせず地に足をつけていた。しかし、それだけだ。シャイナに戦意は無く、意地と執念でマイアと向かい合っているに過ぎない。

ならば、シャイナの友として。マイアの主として。俺が取るべき行動は一つのみだ。

「魔王様……?」

マイアとシャイナの間に入り込む。一瞬、シャイナに向かっていた膨大な殺気が俺の肌を刺すが、魔王としての誇りが怯えることを否定した。

「ア、アウルウ……」

シャイナが弱々しい声で俺を呼ぶ。

待たせたな。だが、安心しろ。今、お前の友が助けに来た。

「魔王様、退いてください。そここそ泥を今から潰すのです。汚れてしまいますよ……?」

「……マイア。悪いが、それは出来ない」

「何故ですか? それは勇者。魔王様の敵です。そして、魔王様の敵は私の敵なのです」

「違う! 勇者は……、シャイナは俺の友だ!」

「アウル……」

「魔王様……。元来、魔王と勇者は天敵同士。友になどなれるはずがありません」

「そうかもしれない……。たしかに、俺達は戦った。けど、そこには憎しみなんてなかった。……ただ、宿命があっただけなんだ。……俺達は戦いの中で分かり合い、握手を交わした。勇者と魔王とし

てじゃない。……シャイナと、アウルとして、友情を誓い合ったんだ　！」

これが俺の思いの全てだ。マイアに届くかはわからない。だけど、これが今の俺が言える全てだ。

「アウル、お前……」

「ふう」

マイアから発せられていた殺気が霧散する。

「まったく。仕方の無い人ですね、我が主様は」

思いは　届いた。

「まだ認めただけではありませんが……まあ、滞在くらいは許しましょう」

「マイア……ありがとう」

やはりマイアは、最高のメイドだ。

「魔王様。最高の猫又メイド長、ですよ」

「ふ、そうだったな」

俺とマイアは微笑み合いながら、城へと入っていく。

「え？　私、助けられた一般人的な感じで終わり？　勇者なのに空

「気がよ？ ふざけんな！」

後には、完全に見物人と化していた勇者が残されたのみだった。

真・魔王が現れた第二話（後書き）

シャイナ

「よう。今回はあまり活躍できなかった勇者のシャイナだ」

アウル

「その友、アウルだ」

シャイナ

「次回予告は私が言うよ。アウルは締めをよろしくな」

アウル

「まかせろ」

シャイナ

「次回。遂に世界は勇者の物に！ 世界中の愚民どもは勇者シャイナを崇め、奉り、尊敬する、勇者シャイナの為だけに生きる奴隷となった！ 世界八カクモ美シク第三話『世界は私の物！』。ひれ伏せ！ 愚民ども！」

アウル

「シャイナの名を騙る偽者め……！ 待っているシャイナ！ 今、俺が救いに行く！」

シャイナ

「……お前、本当に魔王か？」

第三話 君たちのことは忘れない(前書き)

約一時間で書ききってしまいました。ご意見ご感想、お待ちしております。

第三話 君たちのことは忘れない

勇者と和解し、友情を誓い合ってから数日。魔王城には、平穩が満ちていた。

「……今日もいい天気だ」

カーテンを開き窓を開け、朝の光と空気を部屋へと入れる。

「ワイバーンは空を元気よく飛んでいるし」

数匹のワイバーンが仲良く青空を旋回している。

「ゴブリンは仲良く鬼ごっこをしているし」

中庭でゴブリンがナイフを片手に遊び回っている。彼らは大人と子供の違いが分かりづらいが、あのはしやぎ様からして子供ゴブリンだろう。

「訓練場からは兵達の叫び声が聞こえるし」

他にも金属同士がぶつかり合う甲高い音や破壊音が聞こえてくる。

「……うん。今日も穏やかな一日になりそうだ」

「魔王様……!!」

俺がそう締めて窓を閉じたら、マイアが部屋の中へ飛び込んできた。

「大変です魔王様！ 大変なんです！」

「いったいどうしたと言うのだろうか。いつもと違い、マイアには落ち着きがない。」

「落ち着け、マイア。何があった？」

「す、すみません。その、実はシャイナさんが訓練場に行つて……」

「ああ……、訓練場が騒がしいのはそのせいか」

「しかし、それがどうしたと言うのだろうか。シャイナとの訓練は、兵達の技術向上にも意欲向上にも繋がるため、慌てるようなことはないはずだが……。」

「えっと、リリースさんと鉢合わせたようでして……」

「何……！？」

「リリース。あの、リリースか！ たしかにそれはヤバイ。下手をすれば魔王城が崩壊する！」

「訓練場に行くぞ！ 着いてこい！」

「ハイ！」

「俺は準備もそこそこに、窓から飛び立つ。風の魔法を使い疾風の速さで訓練場へと飛ぶ。」

「 見えた! 」

訓練場ではシャイナとリリスが向かい合って構えている。周囲には二人を止めようとして敗れたのであろう、英雄（勇者）達の無惨な姿があった。

（間に合わなかったか……! ）

胸に渦巻く後悔の念。朝、訓練場が騒がしいと思ったときに見に来るべきだったんだ。勇者であるシャイナがいるから気合いが入っていると勘違いした、俺のミスだ。

「 クソツ! 」

そして、目の前で殺し合いを始めようとする二人。それだけは、止めて見せる!

ドオンツ!

俺は二人の間へと、砲弾のように降り立った。

「 ア、アウル! ? 」

「 魔王様……! 」

「 ……二人共、武器を下げる 」

「 ……チツ! 仕方ねーな! 」

「 ハツ! 直ちに! 」

シャイナは渋々と言った様子で。リリスは素直に言うことを聞いてくれた。

「……大丈夫か、お前達」

それを見届けた俺は、敗れた英雄（勇者）達に歩みより、抱き抱える。

「ま、魔王様……よく、来てくれました」

スケルトンの兵Aは、ヒビの入った震える骨の手を上げる。

「言っただろ。お前達のピンチには、いつだって駆けつけるってさ」

俺はその手をギュッと握った。

「ウウ……、オラ達二八、勿体無い、言葉デス……ダ」

プチオークの兵Bが瞳に涙を溜めてそう言ってくれる。

「何言ってるんだ。同じ釜の飯を食べた仲間だろ、俺達」

「貴方が、……アタシ達の主で、本当に、良かったわ……」

満身創痍なその体で、微笑みを浮かべるサキュバスの兵C。

「……そう言ってくれて、俺も嬉しいよ」

俺も微笑み返す。もう安心だと。

「……後は、よろしく、頼み、ます」

兵Aはそう言い残し、目を瞑る。その体からは力が抜け、グッタリとしてしまっている。

まるで、死んでしまったかのように。

「兵Aええええええ!!」

それに続くように、兵B、兵Cも倒れてしまう。他の兵士達も、みな。

「……みんな」

兵Aをゆっくりと地面に寝かし、立ち上がる。
振り返り、腰に差した剣を構え、シャイナとリリース。二人と対峙する。

「 待っている。俺も、すぐに逝く……!!」

仲間達の遺志を胸に秘め、俺は地を蹴った。

第三話 君たちのことは忘れない（後書き）

兵 A

「ヨッス。スケルトンの兵 A だ」

兵 B

「オラ、プチオークノ、兵 B ダス」

兵 C

「兵 C のサキュバスよ。みんな、よ・ろ・し・く・ね」

兵 A

「けど、次回予告ってどうしたらいいんだ？」

兵 C

「好き勝手にしてもいいんじゃない？ 魔王様達も好きにやってみただし」

兵 B

「ナラ、オラ読者サンニ、言イタイコトガアルダス」

兵 A

「お、よし、かましていい！」

兵 B

「デハ……、ブフン！ ブルブル、オラ、悪イプチオークジャ無イダス」

兵 A

「え……っ？ それだけ？」

兵B

「ダス」

兵C

「次回の世界ハカクモ美シクは、『私と魔王様のイ・ケ・ナ・イ関係』。身分違いの恋に愛の逃避行。私のために魔王と言う地位も名誉も捨てて下さる魔王様の生き様をお送りするわ」

兵B

「オラモ活躍スルダスヨ！」

兵A

「っつて！ 俺の見せ場は！？」

愛の力は偉大な第四話（前書き）

ご都合主義？ ええ、そうですねが何か？

愛の力は偉大な第四話

「お待ちください、魔王様！」

「っ！」

背後からの声。その声に止められて、俺は急停止し、剣を納める。

「……なんだ、マイア。お前でも、今の俺を止めることは許さんぞ」

俺に全てを託し、散っていった仲間達のためにも、シャイナとリリースにはお灸をすえなければならぬ。

それを邪魔するなら、たとえマイアであろうとも眠ってもらわなければならぬ。

「シャイナさんとリリースさんに、仕置きをする必要はありません」

「なんだと……。俺に部下の無念を晴らすと言つのか！」

「いえ……。ですから、死んでませんよ。彼ら」

「なに……？」

兵A……は、元から心臓が動いていないし、息もしていない。兵Cは、女性のためあまり近づくのは失礼だろう。

消去法で決まった兵Cで、生死を確かめる。

「……ブヒー、……ブヒー、もう、食べないダス……」

生きていた。しかも、幸せそうな寝言付きで。

「……………」

「ご理解頂けましたか？ どうやら、シャイナ様が来たことでヤル気が出て、ここ数日は寝ずに訓練していたようです。限界が来て寝てしまったのでしょうか」

「……………ああ。すまなかつたな、マイア」

「いえ。メイドとして当然のことをしたまでです」

本当に、俺には勿体無いメイドだ。

「二人とも、すまなかつたな。俺の勘違いに巻き込んでしまって……………」

「勿体無きお言葉、ありがとうございます。しかし、我が身、我が心は全て魔王様のためにあるのですから、謝る必要などありません。何時、如何なる時であろうとも、魔王様が最優先でありますので、私のことなどご配慮なさる必要などありませんのですよ？」

「仲間の事を考えられない魔王など、魔王としての資格はない。リス、お前も俺の仲間だ。もし俺を魔王として認めてくれているのなら、そんなことを言わないでくれ」

「魔王様……………っ、ありがとうございます！ 不肖リス！ 一生魔王様についていきます！」

リスはそう言って跪く。本当はもっと柔らかくしてほしいのだ

が、何が原因かリリースは俺を尊敬してくれているらしく、常に俺の下にいる姿勢を崩そうとしない。

「シャイナも、悪かったな」

「いや、別にいいさ。こつちも無駄な労力は使いたくないしね」

「貴様……っ！ 先程から黙って聞いていれば魔王様に対して無礼な口の聞き方をしおって！」

「んなもんしるかよ。私はアウルの客だぜ？ アンタこそ態度を見直したらどうだ？」

「ま、魔王様の御名前を、呼び捨てだとお！？ 私ですらまだ名前をお呼びしたことなど無いと言うのに……！！」

心なしか、体から黒いオーラを出し始めたリリース。

……まだ、間に合うか？

「リリース、俺は気にしていない。お前もそう怒るな」

「魔王様。魔王様はお優しくすぎるのです。ですから、嫌でも嫌とおっしゃれないのですね。大丈夫です、魔王様。私は全てわかっております。すぐにそのゴミムシを排除致しますので、少々お待ち下さい」

……駄目だ。もう俺の声も届かない。

どうやら、リリースの中には俺と言う名の完璧超人がいるらしく、俺とは違う思考で動いているらしい。そして、こうなるともう俺の声も届きはしない。リリースは自分の中の俺を守るため、対象を破壊

し尽くすまで止まらない。

「マイア!」

「すでに避難は完了しております」

先程から何も言わないと思っていたら、この事態を見越して兵達を避難させていたようだ。
流石、としか言い様がない。

「シャイナ! 逃げろ!」

「……そうさせてもらつよ。なんだかヤバそうだしね」

身を翻して訓練場から出ていこうと走るシャイナ。

「逃がすかあああああああ!」

しかし、一步遅かったらしく、リリースの身体が黒いオーラに包まれる。完全に姿の見えなくなったリリース。黒いオーラは急激に膨らみ、見上げるほどの大きさになる。

「おいおい……、マジかよ」

シャイナが呆然としながら、その口から漏らす。

しかし、それも仕方がないだろう。オーラが霧散し、リリースが立っていた場所に居たのは一匹のダークドラゴン。神話の中に生きる、伝説の生き物なのだから。

G U A a a a a a a a a ! ! !

その咆哮は大地を揺るがし、大気を震えさせる。
俺は即座にシャイナの前に立ち、シャイナを背に隠す。

「ちょ、アウル！ お前の部下だろ！ 何とかしろ！」

「無理だ。ああなったリリースは今の俺では勝てない」

「じゃ、どーすんだよ！ 私に死ねってか！？」

言い争っている間にも、ダークドラゴンと化したリリースはシャイナを睨み付けている。あの状態になっても俺を傷つけるようなことはしないので、今は安心だが、痺れを切らして直接捕まえようとし始めたら終わりだ。俺を優しく掴み、シャイナを握り潰すだろう。

「……1つだけ、方法があります」

マイアがゆっくりと口を開く。

「……いいのか？」

その方法は、マイア自身が禁止したはずだ。リリースも床に伏せ、数日はマトモに動けなくなってしまう。

「な、なに？ 何か方法があるのか？」

「はい。1つだけですが、リリースを止める方法があります。私としては……、あまり勧めたくはないのですが……」

……だが、確かに現状でリリスを止めるにはそれしか手が無いのも事実だ。

「た、頼む。教えてくれ。代わりに、支配下に置きやすい国を教えるからさ！」

「いえ……、それには及びませんが、魔王様」

「何だ？」

「……私にも、後でしてくださいね」

「……何？」

今、何て言った？

「リリスを救うためです」

「……分かった。同じことをすればいいんだな」

それがリリスを救うためなら、一時の恥など甘んじて受け入れよう。

「はい。……では魔王様、よろしくお願いします」

「……ああ」

俺は浮かび上がり、リリスへと向かっていく。リリスはその行動に動きを止め、俺をじっと見ている。

「リリース……」

俺もリリースの瞳を見つめ返す。俺の頭より大きくなった黒い瞳はとても綺麗だ。

鋭い目付きは人間形態と変わらない。だが、人間形態の時は長い黒髪をポニーテールにしており、引き締まった体躯をしているスポーティーな美女だ。しかし、ダークドラゴンとなった今でもその美しさは微塵も失われてはいない。艶やかに輝く漆黒の鱗に、果てしないほど白い大牙^{たいが}。巨大な翼は一度の羽ばたきで嵐を起こし、その爪はこの世の全てを両断する。まさに、神話に相応しい生き物だと万人が答えるだろう。

「頼む……、落ち着いてくれ」

神話に生きるダークドラゴンを静める唯一の方法。

それは

「……ん」

「お、おでこにキス、だとお!?!」

シャイナの言うように、おでこにキスだった。

!?!?!?!?

キスした途端に目を白黒させ、目に見えて狼狽するリリース。

そして、ボンツという音と共に出了た煙によって、また姿の隠れてしまうリリース。

しかし、煙が晴れるとそこにダークドラゴンの姿はなく、人間形態のリリースの姿があった。

……ただし、顔を真っ赤にして目を回しているが。

「……何度やっても、なれないな」

多分、一生慣れることはないと思った。

「さすが魔王様です」

「納得いかねー……」

シャイナの意見には、俺も大いに賛成だった。

愛の力は偉大な第四話（後書き）

リリス

「はじめまして。魔王様の忠実なる僕しもへ、リリスと」

マイア

「魔王様におでこキスの権利を貰って上機嫌のマイアです」

リリス

「な、何！？ そんな羨ま、いや妬まし、否怨めしい事を魔王様とだと!？」

マイア

「どんどん怖くなっていきますよ……。しかし、リリスさんだって魔王様にしてもらったではありませんか」

リリス

「そ、そうなのか？ ドラゴンの時の記憶は曖昧でな……。くっ、思い出せぬ自分が許せん！」

マイア

「それでドラゴンになった場合、自傷行為に走るんですかね……。まあ、それは後の楽しみにしておくとして。リリスさん、次回予告をお願いします」

リリス

「う、うむ、承った。次回、世界八カクモ美シク第五話『素晴らしき魔王様』。魔王様の凄さと素晴らしさを原稿用紙にして五千枚。ラジオ番組にして二時間。ドキュメンタリーとして十二時間お送り

させてもらおう。本来ならばその倍でも語り尽くせぬのだが、時間と予算が足りず断念する次第だ。真に無念だが、次回を期待してもらいたい」

マイア

「ほう……、それは要チェックですね。次回は私にも声をかけてください。協力は惜しみません」

リリス

「同士よ……！ 共に魔王様道を追求しよう！」

マイア

「ええ！」

アウル

「……許可した覚えはないんだが？」

職業・勇者で出身・魔王城な魔王が出てくる第五話 (前書き)

……ええ。どうして、こうなったんでしょうね。

駄文ですが、何卒よろしくお願いします。

感想・ご意見もよろしければ下さると嬉しいです。

職業・勇者で出身・魔王城な魔王が出てくる第五話

「模擬戦？」

「そーそー。前回あのドラゴン娘に一方的にやられたのがシャクでさあ。なんとかリベンジしたいんだよねー」

それで俺と模擬戦か。

「それはいいが、今の俺ではリリスには勝てないぞ？」

「は？ じゃ、どうやって部下にしたんだよ」

「それは……」

あまり話したくないんだが、どうしようか。

「それは私から説明しましょう」

俺が悩んでいると、シャイナの後ろからマイアが現れた。

「うわっ！？ い、いつの間に私の後ろに！？」

「企業秘密です」

……企業ではないだろう。まあしかし、マイアには秘密が多い。

長いこと一緒にいるが、マイアの半分も俺は知らない。少し寂しい気もするが、まだまだ時間はある。少しずつわかりあっていけばいい。

「……ま、まあいいや。んで、あのドラゴン娘がアウルの部下になった理由ってのはなんなんだ？」

「はい。あれはまだ魔王様が反抗期の頃……」

「ま、待て。そんなことまで説明しないとイケないのか？」

かなり恥ずかしいんだが……。

「大丈夫です。そこまで深い話にはしません。今回は簡潔にしますので」

じ、次回があるのか……？

「なんだっていいから早く説明してくれよ。こっちはワクワクして待ってたんだからさあ」

「では、続きを。……そう、あれはまだ魔王様が反抗期の頃でした。反抗期の魔王様は先代魔王に反抗し、勇者を目指しておられました」

「うう……」

今思い出すと、とても恥ずかしい。何をやっていたんだ、昔の俺！

「魔王の反抗期が勇者って……。納得できるような、できないような……」

魔王の反対の存在が勇者だったんだ！ 魔王的に非行に走る行為が勇者的な行動だったんだ！

「勇者を目指しておられた魔王様は、手始めに近くの町に行きました」

「ん？　なんで町なんかに行ったんだ？　勇者になりてーんなら、先代魔王殺しやいー話しじゃねーか」

「魔王様の考えでは、勇者は旅をし、その果てに魔王を討伐するものだったからです」

城の書庫で読んだ本にはそう書いてあったんだ。だから仕方ないんだ。……そう、仕方ないんだ……。

「なるほど」

「町についた魔王様は、まず装備を整えました。その時、鍛冶屋と共同開発した剣がそれです」

マイアはシャイナの腰に差してある、『勇者剣ライトエンド』を指差す。

「えっ！　マジかよ！？　じゃ、まさか先代の勇者って……」

「魔王様です」

言っなああああああ！！

「……そいつは驚きだな。けど、アウルがそんなに取り乱すことの方が驚いたよ……」

「装備を整えた魔王様は、勇者らしく人間に害なす魔物や魔族を討伐しようと旅に出ました。魔物は食料や交易品として売れますので、生態系が崩れない程度に倒し、魔族はもう人を襲わないことを約束させて実家へと行かせました」「実家つて魔王城だよ……。勇者が敵の戦力増強してどーすんだ。何考えてんだ、その頃のアウルは……」

「おそらく、何も考えていなかったと」

……ふ。ああ、そうさ。何も考えてなかったさ！ これで満足か！

「アウル……」

そんな目で、俺を見ないでくれ……。死にたくなる……。

「そうして紆余曲折がありながらも、魔王様はある日気づきました。勇者なら、仲間が必要じゃないか、と」

「ほー」

「そこで、魔王城の書庫より持ち出した、『仲間にしておきたい生き物ベスト100』を読み、思いました。そうだ、ドラゴンを仲間にしよう、と」

「……色々つつこみたいところはあるが、ひとつだけ言わせてくれ。なんでそこでドラゴンを仲間にしよーとした!？」

……いや、先代魔王には特別なワイバーンがいたから、俺も空を飛べる生き物がいいなと思ってさ。

「それでどーしてドラゴンが出てくる！ 巨大怪鳥とかじゃダメなのか！？」

……勇者っぽくなかった。

「胸を張って言うことじゃねー！..」

「珍しくシャイナさんがツッコミキャラになってますね」

「好きでやってんじゃねーよ！..」

「まあそれはいいとして……」

「……私、コイツラがよくわかんねー」

……すまない。

「……なんやかんやでドラゴンを仲間にすることを決意した魔王様でしたが、ドラゴンは伝説の生き物。そのほとんどは昔に息絶え、生き残りがいるかどうかもわかりませんでした。ですが、我らが魔王様はそれしきのことでは諦めません。ドラゴンを奉る辺境の地へと赴き、そこで封印されているドラゴンがいたことを知ったのです。それが……」

「リリースだったと」

いや、違う。

「ちげーのかよー!」

「正確には、リリスさんだけではなく、ホワイトドラゴンも封印されていたのです。リリスさんに聞いたところ、喧嘩をしていたリリスさん達は、疲労しきったところを巫女が何かに命がけて封印されたいらしいです」

「なんつーか、意外と間抜けな伝説どもだな……。ん？ てことは、もしかして……。ホワイトドラゴンも、居たり、する、のか？」

「はい」

当たり前だろ。

「ひ、非常識すぎる……」

それが魔王だ。

「……勇者だったくせによ」

……若気の至り、というやつだ。

「そうして、ドラゴンの存命を知った魔王様は二匹の封印を解き、めでたく仲間にしたのです」

「もう少し詳細に話してくんねーとわかんねーんだけど」

「それは、魔王様の口から聞いた方がよろしいかと。私も、あそこまで激しい戦闘では近づけませんでしたので……」

「アウル」

……ああ、話そう。黒と白。二つの伝説が俺の仲間となった、その経緯を。

職業・勇者で出身・魔王城な魔王が出てくる第五話 (後書き)

アウル

「明かされる過去。辿り着いた真実。彼らは今、歴史を知る……！」

マイア

「魔王様の黒歴史ですが」

アウル

「……というか、何故マイアが俺のあの時を知っているんだ？ 城に置いていったはずだが……」

マイア

「魔王様観察日記を一日でも白紙にするわけにはいかないので、先代魔王をシメテ尾行しました」

アウル

「……俺は時々、マイアこそが俺の知る中で最強の魔族じゃないかと、そう思う」

マイア

「でしたら、最高の魔王様はアウル様です」

アウル

「……いつか、マイアの言葉を真実に見せる。それまで、見ていてくれるか？」

マイア

「はい。喜んで」

アウル

「次回、世界八カクモ美シク、第六話『生まれてきた意味』。……君にもあるはずだ、生まれてきた意味が。託された想いが」

マイア

「魔王様観察日記を完成させることこそ、私が生まれてきた意味であり、託された想いです……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1731z/>

世界八カクモ美シク

2011年12月17日07時50分発行